

原著論文

血液内科病棟における入院時の コンプライアンス不良患者に対する取り組み

盛岡赤十字病院 薬剤部

菊池 智秋・菊池 光太・茂木 悠
佐々木栄一・蒲澤 一行

Interventions for in-patients with poor compliance in the hematology ward

Chiaki Kikuchi, Kota Kikuchi, Haruka Motegi
Eiichi Sasaki, Kazuyuki Gamazawa

Department of Pharmacy, Japanese Red Cross Morioka Hospital

Abstract

To improve compliance with oral medications, duty procedures were revised by a team and a flow chart was created to improve the identification of medications brought by patients, prescription assistance, drug-taking guidance during hospitalization, and guidance at discharge for patients with poor compliance.

As a result of these interventions, the number of medications brought by patients that were identified and the number of instructions additionally provided at the time of discharge were significantly increased. Although there was no significant difference in the rate of good compliance (unused medication error <5%) in the intervention group, an improvement of 16% was observed. The rate of intervention for patients with poor compliance was 32.7%, among which compliance improved in 15.4%. In patients with poor compliance, oral medications were managed by nurses in 51.9%. The fact that medications were managed by nurses in half of the in-patients receiving oral treatment is one factor that contributed to poor compliance following discharge.

To further maintain and improve compliance with oral medications and improve oral medication compliance and adherence by physicians, nurses, and pharmacists, we believe that efforts need to be made to ensure safe medical care with a calm mind.

Key words : Medications brought by patients, identification, drug-taking guidance, guidance at the time of discharge, compliance

【はじめに】

盛岡赤十字病院（以下、当院）血液内科病棟では化学療法を目的に入退院を繰り返す患者においては、内服薬は基礎疾患の治療に加え、化学療法での

副作用軽減や感染予防の薬があるため、併用薬が多くなる傾向がある。そのため、病棟看護師から再入院時の持参薬の過不足や薬の管理など多くの相談が寄せられる。薬物療法においてコンプライアンス不良は、副作用の発現や適切な薬効が得られないなど

の不利益に繋がる可能性があり、適切な医療を行うために内服コンプライアンスの維持・向上が求められている。

平成27年2月から内服コンプライアンスの向上を目的として血液内科病棟と協議して、入退院時の薬剤師の関わりについて業務手順フローを作成した(表1)。このフローに則りコンプライアンス不良患者に対して持参薬の識別、処方支援、入院中の服薬指導、退院指導を行い薬剤師による薬剤への関わりを強化した。

薬剤師の関わり強化による内服コンプライアンス向上を評価するために識別件数、退院時指導加算件数、持参薬の内服コンプライアンスの調査を行ったので報告する。

【対象と方法】

1. 調査期間

調査期間は平成26年8月から平成27年7月までの1年間とし、平成26年8月から平成27年1月までを取り組み前、平成27年2月から同年7月までを取り組み後とした。

2. 調査対象

当院血液内科病棟入院でコンプライアンスに何らかの問題があると判断された患者に対し、当院から処方された入院時持参薬の識別、服薬指導、退院時服薬指導を行ったものを対象とし、これらを全て行ったものを介入例とした。なお、介入症例は病棟看護師と内服コンプライアンスや薬剤の管理方法等について協議したうえで決定した。

持参薬識別を行ったものに対し併用薬剤数、服用回数、年齢、性別を比較し対象期間で持参薬識別実施件数、退院時服薬指導加算算定件数を調査した。服用回数は服用のタイミングを回数として集計した。

例) 毎食後内服→3回

毎食後、毎食前、朝食後2時間、寝る前→8回

コンプライアンスの定義については、処方日数の95%以上服用できていることとし、残薬の誤差を5%以内であるものを、コンプライアンス良好

とした¹⁾。

また、取り組み後の期間においては、コンプライアンス不良と判定した人に対する介入率、内服コンプライアンス改善率、内服コンプライアンス不良患者の内服薬管理状況を調査した。

3. 統計学的処理

統計学的処理はstudent-t検定、 χ^2 検定により行い、 $P < 0.05$ をもって有意な差とした。

【結 果】

1. 患者背景(表2)

取り組み前は男性11名、女性5名で平均年齢は75.06歳、併用薬剤数は6.82剤であった。取り組み後は男性39名、女性21名で平均年齢は73.20歳、併用薬剤数は8.44剤であった。取り組み前後において性別、年齢、併用薬剤数において有意な差はみられなかった。なお、取り組み前の服用回数は3.24回で取り組み後は4.41回と有意に増加していた。

2. 実態

持参薬識別実施率は、取り組み前の入院患者257名に対し43件(16.7%)、取り組み後の入院患者255名に対し89件(34.9%)であり、有意に増加した(図1)。

退院時服薬指導加算算定実施率は、取り組み前の入院患者257名に対し10件(3.9%)、取り組み後の入院患者255名に対し28件(11.0%)で、有意に増加した。

取り組み後における退院時服薬指導加算算定件数28件のうち17件(6.7%)が入院時持参薬の識別、服薬指導、退院時服薬指導を全て行った介入例であった。(図2)。

処方日数に対して95%以上服用出来ている持参薬のコンプライアンス良好率は、取り組み前が11件(25.6%)、取り組み後が37件(41.6%)で有意差はみられなかったものの増加傾向にあった(図3)。

取り組み後のコンプライアンス不良患者52名に対する介入では、持参薬識別、服薬指導、退院時指導を行った例は17件(32.7%)、持参薬

表1 業務手順フロー 当院血液内科病棟 入退院時の持参薬への関わり

2015/6/16

【入院時】 ※コンプライアンス不良症例を優先。

- ①事前に病棟から連絡を受ける。
- ②入院当日、担当看護師が当日内服分の薬を病棟にて確保し、持参薬を識別依頼へ提出。
- ③薬剤部にて持参薬識別。(病棟担当薬剤師に関わらず識別)
- ④病棟担当薬剤師が持参薬確認書の右余白へ「〇月〇日、朝・昼・夕まで」と残薬の内服日数を記入し、医師へ提出。
※残数確認時、②で当日内服分の薬を抜いてあることに留意すること。
- ⑤薬袋へ付箋等を貼り、残薬の内服日数を記載する。
- ⑥病棟担当薬剤師が識別後の薬剤を担当看護師へ届け、情報提供。
- ⑦病棟担当薬剤師が患者個人ファイルの**血液内科病棟 入退院チェックリスト**の左側、「持参薬継続確認・残数チェック・依頼」の欄に押印。
- ⑧電子カルテへ付箋を表示。「退院時の関わり：退院が決まりましたら薬剤部へ連絡をください。退院へ向けて、処方確認および退院指導等を行います。氏名」
※入院日の**18:00までに上記を完了すること！**

↓

↓コンプライアンス向上のための継続した関わり

↓

担当看護師と連絡を取り合う

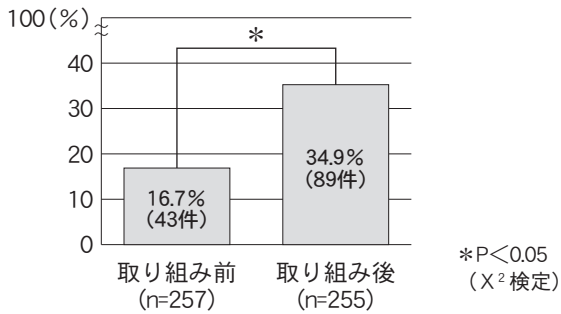
【退院時】 (以下すべて病棟担当薬剤師業務) ※退院日の前日までに作業を終えること！

- ①事前に病棟から連絡を受ける。
- ②中止薬ボックス内を確認し、中止薬を薬剤部へ返却・中止処理を行う。
- ③中止薬ボックス内を確認し、患者へ廃棄の説明を行い持参薬廃棄同意書へ署名してもらう。薬剤部にて持参薬廃棄処理を行う。
- ④頓服薬棚を確認し、各種頓服薬がそろっていることを確認。不足している、もしくは不備がある場合には医師へ処方依頼。
※ジェニナック・カロナールがあることを確認。
- ⑤他科からの処方の有無を担当看護師と共に確認。
- ⑥退院処方が入力されていること、および処方内容を確認。不備がある場合には医師へ修正依頼。
- ⑦患者個人ファイルの**血液内科病棟 入退院チェックリスト**の右側、「中止薬確認 (返却・破棄)」および「退院処方・頓服薬・他科処方をまとめる」の欄にそれぞれ押印。
- ⑧退院指導を実施。

表2 患者背景について

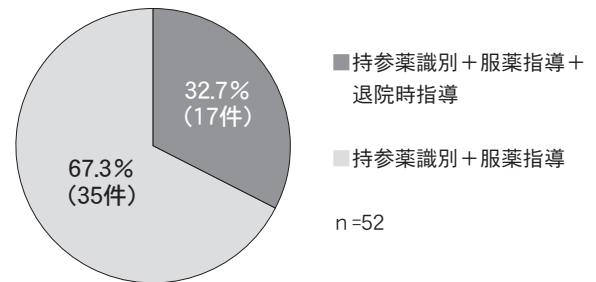
	取り組み前	取り組み後	P value*
併用薬剤数	6.82(±3.00)	8.44(±3.67)	>0.05
服薬回数/回	3.24(±1.20)	4.41(±1.65)	<0.05
年齢(歳)	75.06(±8.52)	73.20(±7.51)	>0.05
男性(人)	11	39	>0.05
女性(人)	5	21	

識別、服薬指導を行った例は35件(67.3%)であった(図4)。コンプライアンス改善率は8件(15.4%)で改善が認められ、44件(84.6%)は変化は認められなかったが悪化した例はなかった(図5)。内服薬管理状況は、看護師管理27件(51.9%)、自己管理21件(40.4%)、自己管理の練習中は4件(7.7%)であった(図6)。コンプライアンスの改善が認められた8件のうち4件は入院期間中も自己管理で服薬し、残り4件においては入院中の服薬管理は看護師管理で退院後は家族の協力が得られていた。



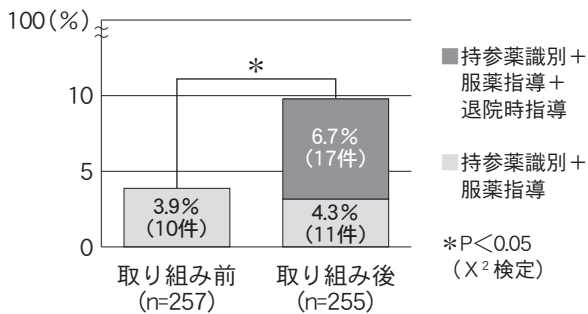
n : 調査期間における血液内科病棟入院患者の識別件数

図1 持参薬識別件数結果



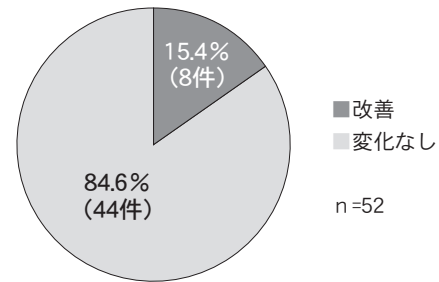
n : 取り組み後のコンプライアンス不良件数

図4 コンプライアンス不良例に対する介入率



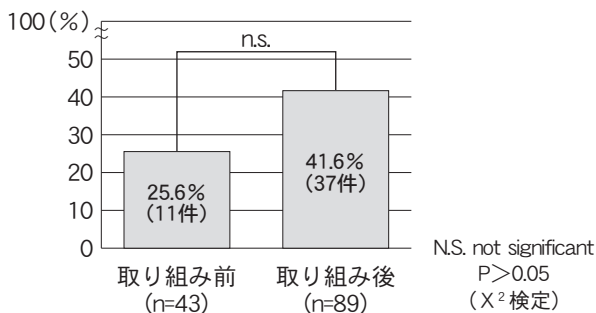
n : 調査期間における血液内科病棟入院患者の識別件数

図2 退院時服薬指導加算算定実施率



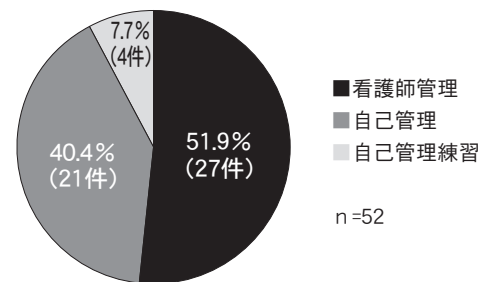
n : 取り組み後のコンプライアンス不良件数

図5 コンプライアンス改善率



n : 調査期間における血液内科病棟入院患者の持参薬識別件数

図3 コンプライアンス良好率



n : 取り組み後のコンプライアンス不良件数

図6 内服薬管理状況

【考 察】

内服コンプライアンス不良に伴う過量投与・過少投与は本来の適切な医療から逸脱することにほかならず、副作用等の有害な症状も引き起こしかねない。このようなことが起きると治療の妨げや緊急入院の増加にもつながると考えられる。

また、現在日本では処方された薬を用法・用量に従って内服せずに再来院することで残薬が溜まってしまうことが社会問題としてあげられている。患者に対する残薬管理、服薬指導、あるいは在宅での薬剤使用の指導、患者に対するサービス向上、医療費の適正化という観点から薬剤師の役割は非常に大きいとされている²⁾。

今回の取り組みの開始に伴い、持参薬識別件数、退院時指導件数が有意に増加し、患者の内服コンプライアンスに関わる機会が増加した。識別件数が増えたことにより当院の処方薬だけではなく他院で処方されている薬の把握にも繋がり、重複投与や相互作用のチェックがしやすくなる。また、電子カルテ上に記録を残すことで医師や看護師等の医療スタッフとも情報共有することができ、チーム医療の推進に繋がると考えられる。今回の取り組みによりコンプライアンス不良患者への関わりを更に増やすことで、内服コンプライアンスが改善されることが示唆された。

患者背景をみると年齢も高齢で併用薬剤数も多いため、内服コンプライアンスの維持が難しい現状がある³⁻⁶⁾。また、服用回数も多いため服薬タイミングの煩雑さが内服コンプライアンスの低下を招く一因となっていると考えられる。退院後の内服コンプライアンスを維持するためには、医師・看護師・薬剤師の協働によって患者の認知機能を評価・把握し、服薬指導を通して患者自身に服薬の意義を理解してもらいアドヒアランスの向上を目指す必要がある⁷⁾。内服コンプライアンスが改善した例は自己管理、もしくは内服について家族の協力が得られている例だったため、患者自身で理解するのが難しい場合は入院期間中の指導や退院時指導で家族にも説明を行い、退院後の内服に関して協力を得ることで家

庭での内服コンプライアンスが維持出来ると考える。

今回の調査結果からコンプライアンス不良患者の半数以上は、理解度が低下し重症な患者であり入院中内服薬は看護師管理を余儀なくされており、自己管理を行う機会が少ない。そのため、退院前に看護師管理から自己管理へ移行するための関わりを強化し、退院後も内服コンプライアンスの維持が出来るよう介入していく必要がある。こうした関わりを持つことで内服コンプライアンスの向上に伴う医療の適正化が推進され、抗がん剤投与による好中球減少時の抗菌薬の服用を忘れることにより熱発しての入院などで治療が中断されることが少なくなり、化学療法をスケジュール通りに進めることで患者の利益に繋がると考える。病院薬剤師は内服の意義について説明し理解してもらう事で、入院中の治療だけではなく過量・過少服用を防いで退院後のQOL維持に関わっていく必要がある。

外来で通院している期間は院外処方となることもあるため、退院時服薬指導を行い入院期間中の経過をお薬手帳へ記載することで院外薬局にも情報提供を行う薬薬連携を推進することが重要である。薬薬連携により院内でも院外問わず残薬や頓服薬の使用頻度を確認しながら薬剤師が内服コンプライアンスの維持に関わっていくことが求められている。

(本論文の要旨は平成27年9月5日 第35回岩手薬学大会で発表した)

文 献

- 1) 藤井 潤：臨床と研究64巻2号42 390-393 (1987)。
- 2) 残薬確認と分割調剤について
www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000.../0000092092.pdf
- 3) Okuno J., Yanagi H., Tomura S., Eur. J. Clin. Pharmacol., 57, 589-593 (2001).
- 4) Raehl C.L., Bond C.A., Woods T., Party R.A., Sleeper R. B.,

Pharmacotherapy, 22, 1239-1248 (2002).

- 5) Salas M., In't Veld B.A., van der Linden P.D.,
Hofman A., Breteler M., Stricker B.H., Clin.
Pharmacol. Ther., 70, 505-517 (2001).
- 6) 秋下 雅弘 : 66 (3) 372-376 (2015)
- 7) 三浦 昌朋 : 薬学雑誌 127 (10) 1731-1738
(2007)